

【中学校 作文 優秀賞】

未来は変えられる

三和中学校 二年

西平 笑香

「二千十五年に第三次世界大戦がおこる。」

このことばに、私は衝撃を受けました。これは、偶然見ていたテレビで予言されました。

私が住んでいる三和地域は、青い空の下さとうきびが風にゆれ、とてもおだやかな時間が流れています。しかし、六十四年前は沖繩戦の激戦地としてたくさんの人が殺し合い、かけがえのない命が失われていった悲しい場所でもあります。

そんな場所に住んでいる私は小学生のころから学校などで戦争と平和について学ぶ機会がたくさんありました。でも、人の死体などの残酷な写真や映像を見るのが苦手な私は、自分か積極的に戦争について調べることはありませんでした。でも、

「もう中学生にもなったし怖いからといって戦争から目をそむけてはいけません。体験した人はもっと辛かったんだから。」と思い、自分の目で六十四年前の出来事を確かめることにしました。

私は、一冊の資料を手にとりました。その資料には戦争体験者が実際に自分の身に起こったことがリアルに書き記されていました。家族が爆風で岩にたたきつけられて体がぐちゃぐちゃになったこと、さつきまで会話していた人の首がふきとび胴体だけになったこと死んでから何日もたった泥まみれの死体が無数に転がっていたのを見たことなど、どれも悲惨という一言では言い表せないほどのものでした。もし、自分があんな体験をしたら：そう考えるだけでも背すじが凍りつき、うまく想像できません。きっと、戦争体験を証言して下さった方々は、

「もう辛い過去は思い出したくない。言葉になんてしたくない。」という思いを涙とともにぐっとこらえて事実を伝えて下さったと思います。

「私達にはあんな体験をさせたくない。平和な世界を築いてほしい。」という強い願いをこめ、勇気を出して事実を伝えて下さったと思います。その勇気を無駄にしないためにも人一倍戦争について学び、それを多くの人に分かりやすく伝えていきたいと強く心に刻みました。

資料には、戦時中の写真もありました。私は、

「どんな写真からも目をそらさずに、まっすぐ見つめよう。」と心に決めてから、その写真を見ました。しかし、心に決めたものの、あまりに残酷な写真もあり、何度も目を

そらしそうになりました。でも、その度に、

「戦争体験者もつと辛かったんだ。これぐらいで逃げてたら戦争について学べない。」と自分に言い聞かせました。写真には、けがした足をひきずりながらも歩き続ける人、壕の前で殺された人など悲しいものばかりでした。今では、人が亡くなるとその家族は深く悲しみ、亡くなった人が天国でもさびしい思いをしないように生前の思い出を棺にたくさん詰めこみやさしく送り出します。でも、戦死した人の多くが家族に見守られることもなく、人間の最期とは思えない無残な姿で尊い人生を終えました。戦死した人は最期に何を考え何を思い死んでいったのでしょうか、そんなことを考えながら写真を全て見終わったころ私の心は、半分どこかにおいていかれたような感じでした。

今、日本の平和は憲法第九条「戦争放棄」によって守られています。しかし、平和があたりまえになったこの日本で憲法が改正されようとしています。もし、憲法が改正されてしまったら、私達は今の平和を守り続けることができるのでしょうか。永久に戦争はしないと誓えるのでしょうか。私は不安でたまりません。でも、どんな選択をしようともこんな時だからこそ戦争の恐ろしさ、平和のありがたさをたくさんの人が知り、世界の国々にも目をむけることが大切だと思います。

世界には、日本のように豊かな国もありますが、まだまだ貧しい国もたくさんあります。そんな国では国どうしの争いが多く、私達より小さい子供達も戦争に参加しなければならぬという悲しい現実があります。

「昨日まで仲の良い友達だったのに、戦争のせいで友達どうしではいられなくなった。」ということもめずらしくはありません。

「また戦争がおこる。」という予言を聞きましたが、私はこの予言を信じません。それは過去は変えられませんが、未来は私達の努力しただいでも明るいものにしていけるからです。戦争をおこすのも人間。でも、平和を築いていけるのも人間です。私達は立派な心を持っています。その心は人の気持ちを感じとり、手を差しのべることができる優しい心です。もし、争いをおこしそうな時は多くの人が優しい心を一つに合わせ、もう一度考え直してみるときっと争いの心はなくなると思います。人間の可能性を信じ続けることが、あの予言を現実にならない方法です。

もうすぐ慰霊の日。私は戦死した人々にかげがえのない命を大切にし、平和を守り続けることを誓い、一歩一歩明るい未来へと歩んでいきたいです。